

# 「みどり」を中心に据えた巨大ターミナル駅 周辺整備計画がもたらすもの

こまつ よしあき  
小松 良朗

(株)日建設計 都市・社会基盤部門 都市デザイングループ ランドスケープ設計部 部長

## 1 「みどり」を中心に据えた都市開発の潮流

近年、SDGsを始めとする地球環境への配慮が叫ばれる中、2030年までに生物多様性の保全を目指す「30by30」、2050年のカーボンニュートラルの実現を目的とする「Carbon Neutrality by 2050」など、世界的な取組みとして地球規模で進行している環境問題を食い止めようとする動きが年々活発化している。こうした気運の中、ニューヨークやパリなどの世界主要都市では、豊かな緑を都市に取り戻すことが様々な環境課題の解決のみならず、人間生活のQOLや不動産価値の向上につながり得ると捉え、パブリックスペースを起点とした都市開発が多く行われている。「都市の緑」の価値が改めて見直され、魅力的で住みやすく「選ばれるまち」を目指した都市間競争が激化する昨今、緑豊かなパブリックスペースを主役にしたまちづくりが世界中でトレンドになっている。

「大阪最後の一等地」と呼ばれる JR 大阪駅北

側に横たわる約9haの操車場跡地で展開される都市再開発プロジェクト「グラングリーン大阪」（設計全体統括：日建設計・三菱地所設計）は、駅前に当たる中央部に敷地面積の半分を占める都市公園が配置されている。一見、高密度に合理性を高めてきた都市としての趨勢に逆行するかのような空間構成であるが、都心において真に豊かな時間を過ごすことができるパブリックスペースが、これからの駅前開発・都市開発において果たす役割や価値について、グラングリーン大阪の事例を通して紹介させていただきたい。

## 2 官民連携により大規模ターミナル駅前に うまれた寛容なパブリックスペース

大阪は、かつては河川が広がる潤った大地であり、中世には多くの堀が開削され水運が発達し、水の都として繁栄した。明治7（1874）年に大阪駅が開業すると、このエリア周辺は鉄道貨物駅として開発され、水運から陸運の玄関口となった。その後、貨物駅の役目を終えると、その跡地は人々が集う街「グランフロント大阪」「グラングリーン大阪」として生まれ変わる事となった。約240万人/日の交通人流がある西日本最大のターミナ

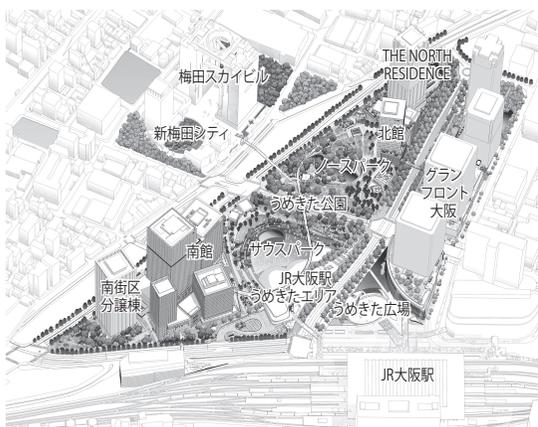


図1 「みどり」を中心に据えたうめきた2期開発の全景



写真1 多くの人々が思い思いに過ごすサウスパーク

ル駅である大阪・梅田駅。JR大阪駅の北側に位置するうめきた地区の開発は2002年に始まり、これまで先行開発区域(グランフロント大阪)が2013年に開業した。その後2014年の民間提案1次募集後、国・大阪府・市が2015年に策定したまちづくり方針「みどり」と「イノベーション」の融合拠点を実現するため、2017年の開発事業者2次募集において、中央に広大な都市公園を有する開発プログラムが目標として定められた。その後、多様なバックグラウンドや価値観を持った人々が集う「寛容」な都市空間として、三菱地所(株)を代表とする開発事業者JV9社により“Osaka MIDORI LIFE”の創造という都市ビジョンが構築され、世界的に活躍するランドスケープアーキテクトGGNによるデザインリードと地域に根差した設計者の経験値との融合により、プロジェクト関係者が一体となって新たなまちづくりに取り組んだ。こうして、関西国際空港とも直結する新駅に降り立った瞬間、豊かな自然を有する質の高いパブリックスペースが国内外の来街者をお迎えする。「みどり」を主役にした大阪の新たな玄関口が生まれることとなった。

### 3 公園の中にまちをつくる、公園がまちをつなぐ

本プロジェクトでは、中央を横断する道路や公園と民地の敷地境界を越えて、敷地全体が人々をやさしく迎え入れ、通り抜けや回遊性を生む「公園」であると定義し、公園の中にまちをつくるように、以下の三つのデザイン方針により空間骨格が形成されている。

一つ目の方針は、敷地を一つの「潤ったみどりの大地」として捉えることである。かつて大阪平野は淀川を始めとする多くの河川が広がる土地で、うめきた地区もその昔は湿地であった。そのような「潤った大地」を再生したいという初期構想に事業者を始め設計チームの皆が共感し、都市公園、道路、南北に分かれた民地を含む敷地全体を一続きの大地として捉えシームレスに計画する

ことで、来街者が常にアクセスしやすい大阪ならではの風土を活かした生命力溢れる身近なみどりがまち全体に創出されている。

二つ目の方針は、「ランドフォームによる明快なまちの構造と多様な居場所の創出」である。南北街区を跨る最大3mの高低差を持った彫刻的なランドフォーム(地形)は、道路を挟んだ南北の大地を地続きに感じさせるとともに、大阪駅前に対して開かれた都市的な広場空間サウスポークの「芝生広場」、梅田スカイビルの「中自然の森」等とつながるノースパークの「うめきたの森」、南北街区を横切る道路の歩車道と一体となった居場所「ステッププラザ」といった三つの「コア」を創出しており、周辺のまちとつながるパブリックスペースの核が明確にデザインされている。公園内を歩くと、地形によってうまく視線がコントロールされ、異なるシーンが次々と見え隠れすることで自然と足を進めたいくなる。地形によって風景

#### ランドフォーム、コア

- ①南北街区をまたいで水平・垂直にうねる地形「ランドフォーム」を配置し、周辺も含めた空間を一体化するとともに、地形を生かした多様な体験を生み出します。
- ②公園の名所となる3つの主要空間「コア/核」をつくります。



#### プレイス、パス

- ③建物と一体となった寛容な空間となる「プレイス/間」をつくります。
- ④南北を貫く主要動線「パス/道」が多様な空間、アクティビティをつなぎます。



@NIKKEN SEKKEI LTD

図2 デザインフレームワーク

に奥行や立体感が生まれ、丁寧な微地形のディテールデザインにより高さの異なる視点場や斜面地、平地といった個性のある多様で快適な居場所が生まれ、誰もがその時々気分やニーズに合わせてお気に入りのサードスペースを見つけられるようデザインされている。

三つ目の方針は「周辺のまちや建物間とのつながりの強化」である。街路に正対させた建物群の統一的な街並みが都会的な表情を見せるグランフロント大阪とは対照的に、グラングリーン大阪では特徴的な敷地形状に対して建物の正方形のフットプリントが意図的に角度を振って配置され街路空間に緑豊かな「間」が顔を覗かせている。裏のない正方形平面で統一した建築ボリュームを整然と並べるのではなく、旧国鉄貨物駅の扇状の敷地形状を活かし、ランドスケープに馴染ませ、それぞれ角度・スケール・外装を変えて配置している。また、ボリュームを都市公園から奥の民地に向かってスタッキングさせることで、周囲のグラン

フロント大阪や梅田スカイビルとも一体となって公園を囲む、すり鉢状の群造形「アーバンスケープ」を形成している。都市の余白のような空間が、街区の境界を超えて周囲の既存建築群をも取り込む一体的な都市景観を生み出している。また、ランドフォームの平面形状と逆位相の平面配置で計画された敷地全体を貫く歩行者用の回廊「ひらめきの道」は異なる高さの視点場を持ち、新駅・先行開発区域など周辺のまちとのつながりを空中デッキレベルでつないでいる。

#### 4 「みどり」の多様な価値を評価・可視化する試み

「みどり」を都市に取り戻す動きがグローバル規模でのトレンドとなっている一方で、「都市の緑」の有する多面的な価値を誰にでも分かりやすく伝えることが難しいという状況から、人や社会、都市に対してもたらす緑の効果が理解されにくいという課題が存在している。緑には大きく三つの価値があり、「生産性の向上」や「交流促進によるイノベーション」といった【社会的価値】、「土地・不動産価値の向上」等や「都市競争力の強化」等といった【経済的価値】、それらの基盤となる【環境的価値】が挙げられる。

グラングリーン大阪では、まず手始めに先行研究の調査等を通じて緑が持つ【環境的価値】の評価・可視化を行った。「みどりのものさし」として、その価値を温室効果ガスの削減、空気の浄化、温熱環境の改善、生物多様性の促進、雨水流出の

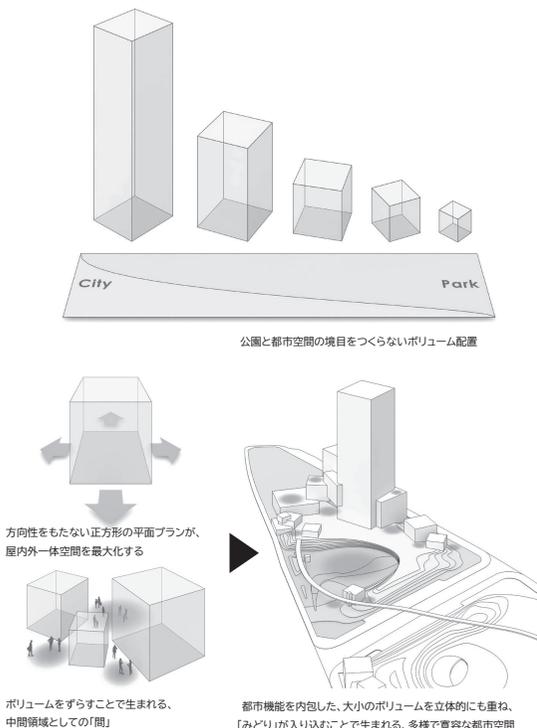


図3 建築ボリュームデザインのフレームワーク

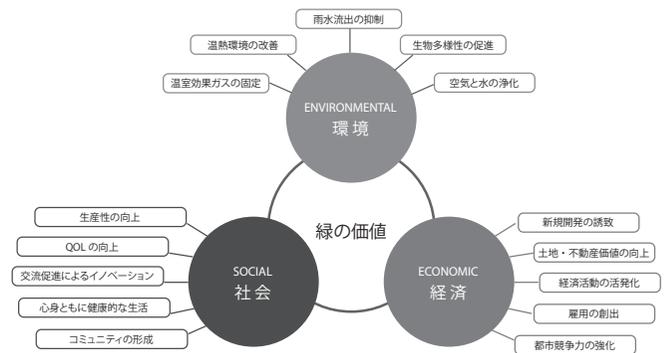


図4 みどりが有する三つの価値

抑制の五つの指標に定め、具体的な数値やビジュアルなどで可視化した。グラングリーン大阪では、うめきた公園を中心に街区全体で1,600本以上の高木の緑を導入しており、緑陰や植栽・水景等の蒸発散による微気象調整効果で都心のクールスポットを創出しているとともに、公園と民地一体で雨水流出抑制やCO<sub>2</sub>固定、生物多様性の促進などの効果があるため、そのようなグラングリーン大阪の環境への貢献を可視化した。

今後もグラングリーン大阪のような「みどり」を中心に据えた開発が促進されるためにも、これらの緑の価値を評価し可視化することは非常に重要かつ必須である。このような取組みは、本プロジェクトに関わる者の責務とも捉えており、引き続き、社会的価値、経済的価値においてもSNS分析などの客観的データに基づき、分かりやすく

評価・可視化していきたいと考えている。

## 5 これからの社会資本としての都市の「みどり」

2024年9月の先行まちびらき後、驚くほど多くの人びとが昼夜を問わず、うめきた公園で豊かな時間を過ごしている姿を目にする。そして多くの人々が行き交う駅前の都心の真ん中にもかかわらず、広い空のもとで蝶が舞い、鳥のさえずりや虫の音を聞きながら四季の移ろいを感じることができ、豊かな自然とともに過ごす時間の大事さを改めて気づかされている。「みどり」と建築・都市が融合し、人々が自然の中で思い思いに集い、楽しむことができる寛容なパブリックスペースの存在は、多くの人々の心の拠り所として根付いていくだろう。また、駅を降り立ったら最初に目に入る豊かな「まちの顔」の存在は、誰もが自分のま

ちとして誇れるシビックプライドを醸成し、まち全体の永続的な価値向上にもつながると考える。2025年に開幕を迎える大阪関西万博に向け、商業施設、ホテル、オフィス、MICE 機能を有する南館が2025年3月にオープンし、国内外の多くの人々をお迎える。このグラングリーン大阪が実現した都市開発モデルが、2027年度の全体まちびらきを経て、次代の複合開発の一つのモデルとして発展していくことを期待している。

評価項目					
	温室効果ガスの削減	樹木による空気浄化	温熱環境の改善	生物多様性の促進	雨水流出の抑制
イメージ					
概要	植物は成長の過程で温室効果ガスを吸収・固定	緑による汚染物質の吸収・吸着により大気環境を改善	緑陰の日射遮蔽および葉からの蒸散効果により温熱環境を改善	植栽の階層構造化、多様な生息環境の創出により生物多様性を促進	土壌・樹木・施設の雨水貯留・浸透機能により雨水流出を抑制
評価方法	樹木の樹種・本数・胸高直径から、樹木による年間のCO <sub>2</sub> 固定量を算出	樹木による年間の大気汚染物質(SO <sub>x</sub> , NO <sub>x</sub> , O <sub>3</sub> )の吸収量を推計し、大気の浄化効果を算出	気象条件などを設定し、みどり豊かな計画と高木と水面がないシナリオ等と比較し、温熱環境の改善効果をシミュレート	衛星画像の解析による樹林地データをもとに現況とエリア開発後に予想される生態的ネットワークをBefore-Afterで可視化	計画降雨条件や年間降水量での雨水流出抑制施設の効果やみどりの大地の浸透能力を可視化

図5 みどりの「環境的価値」が有する評価項目

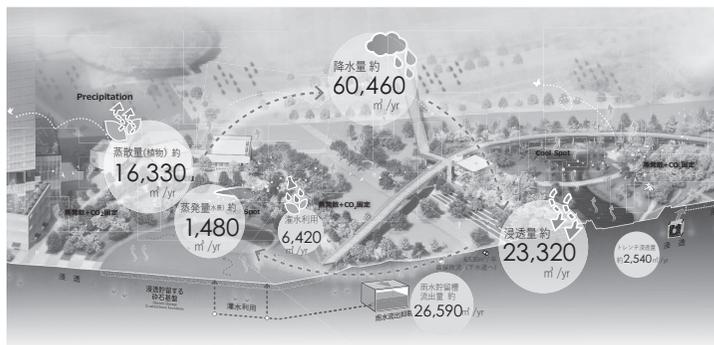


図6 うめきた公園における水循環ダイアグラム

### (設計クレジット)

設計全体統括：日建設計・三菱地所設計  
 ランドスケープ：GGN(デザインリード)、  
 日建設計(デザイナー)、三菱地所設計(南館範囲デザイナー)  
 北館設計：日建設計・竹中工務店  
 南館設計：三菱地所設計・日建設計・大林組・竹中工務店  
 公園施設設計：日建設計(大屋根施設を除く)(VS.設計監修：安藤忠雄建築研究所)  
 大屋根施設設計：SANAA 事務所